

# ル(道)・オタス(志)そして…

## ——知床半島一周踏査——

1980年

伊 林 奈 美

サバイバル・プロジェクトによって、知床半島一周踏査が行なわれた。これはその行動の記録である。隊員は四元をC・Lとして西山、室沢、織田、伊林の総勢5人である。過去に南側からアタックし北側を回って完遂された記録はない。北側の絶壁が頑なに人間の侵入を拒み続けてきたからである。そのために計画当初からかなりの困難が予想され、経度も変更や修正を強いられ、討議が繰り返された。最大の問題点は、この地域の詳細な資料がなかなか手に入らず、従って行動の予測がつかなかったのと、技術的な力量不足にあった。前者においては、当然途中で断念し引き返す可能性も考慮されたが食糧面においてサバイバル形式をとるならそれこそ飢餓状態に陥り、進もうにも戻ろうにも身動きがとれなくなることが危ぶまれ踏査一本に絞るべきであるというサバイバル無意味論も出た。結局、比較的安易な南側だけにサバイバルを限定する事で決着がついた。後者については、1回生が3人と云う事で当然経験不足が、問題にされた。絶壁を何とか懸垂下降で下れたとしても、再び登れる確証のない限りザイルは反対に、専断な行動を促す道具となる。いささか泥縄式ではあるが、少しでもカヴァーするために比良・六甲において予備合宿が持たれた。以上の点から次回への飛躍のための足掛り的な予備踏査の色が出発前まで濃かったが、隊員達の気迫は強く北側踏査はC・Lの判断に委ねられた。



アイヌ

知床半島が細長く彼方に浮かんでいる。実際に眼前にその未知なる姿を静かに横たえている。隊員達はしばし沈黙を守る。その心中にはすでに出発前のさまざまな障壁による苦悶はなく、ただ透明な静寂だけが満ちているのであろうか。知床半島はそれほど幽遠にはるか北国の孤高を守っていた。



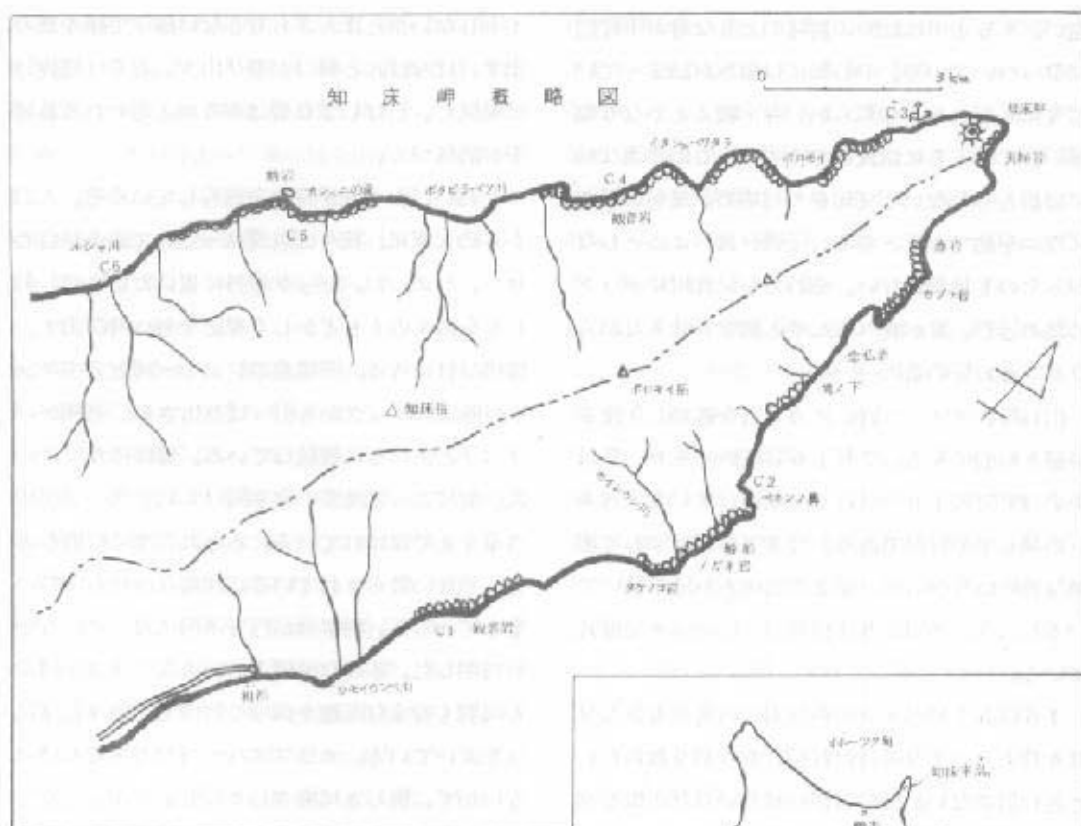
流氷

7月15日正午ラウスにて先発隊と本隊合流。その夜はまさに前夜であった。先発隊が観光船から撮影した北側の写真を見ながら全員大いにはしゃいだ。90度に切り立った絶壁は予想通りであったが、その下に細く白い浜があったのだ。干潮の時に進めば何とか通れそうであった。こちらで知り合った愛沢氏は半分我々の計画に、呆れながらも洗面器一杯分のトド肉を持ってきてくれた。汽水点近くで釣れる赤い筋の入ったヤマメらしい体長15センチ位の魚と共に河原で焼いて酒盛りをした。その頭上を矢鱈馬鹿でかいカラスが大群で飛び回っている。最後の晚餐と思うと初めて食べる鯨に似たトド肉の味もカラスにくれてやる気にはならなかった。まあここの魚は馬鹿で紙切れを餌にしても食いつくそうであるから、最低限川のある所では懸え死にしないで済むそうである。

7月16日15時ラウス出発。天気は相変わらず快晴にはならなかった。瞬間的に風で霧が飛ばされる事はあっても大体終日霧がかかっている。太陽光線が地表までとどかず、日中でも体を動かさないと寒い。一時は官林署の許可がとれず焦ったが、相泊で何とか解決した。ウトロ側に出るつもりだと云っても半信半疑で、岬から向こうは海岸線伝いには行けないと繰り返すばかりなので、それではと、一週間で相泊に戻ると記帳する。海岸は頭より少し大き目の丸い石がごろごろとはるか先まで続いている。歩き難い事この上ない。油断すると足元の石がぐらついて仰向けに引っくり返る。しかし全員張り切っていて歩調は早い。丁度7月20日からコンブ漁の解禁で海岸線に沿って後の断崖にへばりつく様に並んでいる番屋の各々には人の気配があり、煙がのぼっていたりする。時折仕事の手を休めては、大きなザックを担いで

一列に歩いて行く我々に珍らしいものでも見つけた時の様にじっと視線を注ぐ。あの人達の目に我々は実に馬鹿げて無駄な事をしているヒマ人に映っているのかもしれない。やっと人の来ない所までやって来たのかと感服新たにしていいても、くると海につき出た部分をひとつ回ると再び同じ形の番屋が見えてくる。どこまでも砂浜ならぬ岩浜が徐々にその形状を変えながら続く。そうくはない浜がなだらかな勾配をもって濃緑色の海中へと没する狭間を進み、午後17時30分第1キャンプの予定地である観音岩着、早々にテントを張る。もう半ば以上太陽は没していた。我々がテントを張った場所から500メートル程離れた場所に矢張り番屋が一群にかたまって建っている。海岸にいくつも散乱している流木を集めて火をたいている所へ、その番屋の人が一人偵察にやって来る。番屋の人は皆非常に気さくで親切である。やれビールを飲み、風呂へ入って行けの身震いする程誘惑的な申し出を、サバイバル中だぞという内なる声と闘いながら辞退するのは何とも惜しい限りであった。番屋の前の浜で白骨化したアザラシらしい死骸を見かける。多分網にでもかかった死体が放置されたものが、波に打ち上げられたのだろう。この辺はアザラシの生息地でもある。もしかすると極寒の地に生きるアザラシにお日にかかれるかもしれないと、心は早くも明日からの行程に遠く思いを馳せていた。

7月17日あたりの様相は昨日とは一変した。単調な小石の連綿たる行列は、黒っぽい溶岩が流れ出してそのまま固着した様な岩に変わっている。表面が出っ張りだらけでトラバースにはもってこいである。まったく奇々怪々な一枚岩が寝そべってみたり積み重なって、すばらしい景観を呈している。潮が大幅引いているのであろうか、岩窟の



上に黄緑色の海藻がびっしりとへばり着いていて、  
キャラバンの下でぬめる。このような岩礁にウニ  
が多く生息していると語には聞いてきたが、いく  
ら捜せどそれらしいものはさっぱり見つからない。  
ウニ、ウニと喚き散らしながら百滅法冷たい水の中  
を腕まくりをして引っかき回すが、手に触れる  
のは固い岩の感触だけ。最後には半ば諦めて水面  
を睨みつけている。そこへ近くの番屋の子供がや  
って来た。我々が必死にへばりつきながら渡った  
小さな湾入部を、その子供はひょいひょいと身軽  
に岩から岩へ飛び移ってゆく。あれはザックを背  
負っていないからだと、負け惜しみを言いながら  
それでも子供の後について行くと、子供はどこか  
ら確切れを拾ってきて岩陰をつづいている。岩  
の上で、我々の無駄骨を見ていたのだろうか。子

供は器用に黒っぽいウニを一つ釣り上げる。大きなウニだ。どっと喚声が上がった。そうすると現金なもので、寒いと言って指をつけるのも嫌がっていた海中へ、ずぶずぶと膝まで浸りながらのウニ捜索班がまたたく間に結成された。最初のうちは、なかなか岩膚とウニを見分ける事ができないが、日が慣れるにつれウニのいそうな所に当たりをつける要領を飲み込む。2・30個も岩場に放り上げられると全員先を争って貪り食う。まだ虚空を切って触手を突かしているウニの尻鰓からナイフを入れ真っ二つに割る。思ったよりもウニの殻は

脆い。すると中には卵の黄味のような身が千片殻にひっついていて、中心部には海水が詰まっていた今にも崩れそうな柔らかい身を嚥るとかなり塩辛い。そのうちに飽食してくると、この単調な味には耐えられないと文句をつけ始め、挙句の果てにはウニを捨てようとする。子供が食べようとしなかったのも無理はない。それでも夕食用にザックに詰め込む。誰か食べるんやと愚態を吐きながら。ウニさんお気の毒に……。

化石氏、タケノコ岩、メガネ岩を通過し午後3時過ぎ船泊に至る。7月16日に約4キロ、7月17日すでに13キロ近くを踏破している。ペキンの鼻もすぐ目前である。今までの所はさして困難な箇所はなかった。岬までは何とか道が続いていると云う。予定より1日分は早いピッチで進んでいる。

16時5分ペキンの鼻到着。言葉少な気な夕食を終えると19時には就寝、誰も酒を飲みたいと言いださない。波の音が心地良い自然の歌を奏で、程なく睡魔に全身が弛緩してゆく。

一赤岩は越えられるかなあ。みんなここで引き返して行くが。山を巻かないと無理だろう。だが、山に入ると熊が際々出没して危いぞ。聞き取り難い方言は悲観的だ。

一以前行った人がいるかって。どうだろう。まあないだろうな。クマ徐けはその笛だけか。ふ……。

7月18日の昼前の事である。赤岩の隣の番屋で小休止をとらせてもらっている所へ、午前中の仕事を終えた漁船が次々と着岸し、昼食を摂りに大勢の陽焼けた男達が船から降りて来た。私達もその中に混じって大きなストーブの回りで暖をとる。話を聞いてみると一シーズンで一隻の船が何千万もかせぐと云う。一日三食酒付7千円でバ

イトしないかとまんざらでもない様子で膝を乗り出す。ぼんぼんと軽口が飛び出す。彼らは底抜けに陽気だ。しばし30畳はあるかと思われる番屋中が活気づく。

一おい、カラスが荷物を荒らしているぞ。入口からの大声に、我々は瞬間はっとして顔を見合わせた。しまった。ザックを外に置いたままだ。靴ヒモを結ぶのももどかしく裸足で外へ飛び出す。惨状が目に入る。非常食のジフィーズとアルファ米が器用にザックから引っぱり出され、中味がバラバラとあたりに散乱している。無惨にカラスの鋭い嘴によって幾多の穴を開けられた空の袋が相当遠くまで運ばれている。あされた事に蚊取り線香まで食い散らされている。沈痛な面持ちで拾い集めてみると、約半分が行方不明になっている事が判明した。不埒な面構えの巨大なカラスが何羽も何羽も安全な距離を保って岩の上で憎々し気にうそぶいている。カラスに八つ当たりするわけにもいかず、悔しさに歯ざしりした。しかしこうなった以上このまま進むしかなかった。幸いな事に予定日数分だけは手元に残っていた。急がなければならぬ。我々は番屋の人々に別れを告げ、赤岩を登り始める。険しい赤土でできているために赤岩と呼ばれるようになったのであろうか。なるだけ固そうな部分に手がかりを求めるがそれでもバラバラと砕けてひっきりなしに落石する。脆いから卓に重心をかけるなど言われても、こっちも必死である。少し登ってはずり落ち又登る。どうにか稜線に出ると今度はクマザサのブッシュである。始めはそれでも終まで位の可愛らしいやつで片っ端から踏みつけて行けばよかったが、頂上付近のひらけたく見晴らしが良いという意味ではなく単に広いという意味である。なぜなら飛び上がらなければ決して見晴す事などできない。草地に出ると、幾度及び優占度百パーセントのという養生で

ある。ザックを斜め前方に突き出しザックの重さを利用してショルダー・アタックの要領で進行に押し進む。その場合軍隊式に陸を胸に引くつもりで歩かないとからまった茎に足を取られつんのめる。下りになった時先頭の声がかかに聞こえた。何度も繰り返して何かを言っているらしいのだが、よく聞きとれない。一様に耳を澄ませる。

ーク、クマあ……

確かにそう聞こえた。我々は立ち竊んだ。今まで熊の事などすっかり忘れていたのだ。それからの下りは想像に難くない。海岸線に向かって急な傾斜をスキップしながら駆け下りたと言っても決しておかげさではないだろう。クマザサがお化けフキやハイマツの幼樹に変わり、やっと海岸にたどりついた時は多分みな安堵に胸をなでおろしたに違いない。しかしその安堵も東の間、海岸までは熊と言えども下りに来ないと云う我々の予想がはずれている事を、砂の上にしっかりとつけられた大小さまざまな獣の足跡が示していた。その時までには全員ザックにつけていた鈴を失くしていたが、もしあったなら奪い合いになっていたかもしれない。しかし同じ日にもう一度熊に直面しようとはその時誰も考えていなかった。いや正確に言えば必死にその可能性を否定していた。12時5分、知床岬の燈台の下に我々はいた。眼下に広がる緑の草原は遠くで見ると分にはこの上なく美しかった。歌にあるようなハマナスは見られなかったがエゾスカシユリが時たま咲いている。行程にすると知床半島は外弧を描いているためすでに半分以上来た甲になる。実質的には80パーセント以上残っているとしても……。燈台の礎石に刻まれた昭和30年という文字にふと不思議な感動が奥深い所から湧いてくる。この燈台は我々が生まれる前に多分海から物資を運び込んで建造され、長い年月の間ほんの限られた人々と接触を持っただ

けで風雨に耐え続けてきた。そして一生この燈台を見ずに過ごしたかもしれない我々と、出会う運命にあったかのように今ここに存在している。再びザックを担ぎ上げ歩き始める。いつまでも感傷に浸っている時間はない。遠くで一頭のエゾシカが思いもよらない闖入者に驚いてじっと耳を立てている。考えてみれば鹿がいれば熊がいけないわけではないのだが、比較的に見通しがよいので我々は安心してた。おまけに小径までちゃんとついている。と、まだ新しい、一かかえもありそうなどぐろを巻いた物が脇に落ちている——げえっ、我々ははたと思い当った。さっきから至る所で繰り返されたすり鉢状の大穴を何と言う事もなく見過ごしてきたがもしかしたら……ある恐ろしい疑念が脳裏を横切った。その時すでに遅く、日の前数メートルの紫みが突然ガサガサと激しく揺れたかと思うと、暗褐色の丸っこい小さなやつが飛び出した。そして再びものすごい勢いで草むらの中へ。まさに熊突猛進。その間約2秒。直観像が腹にひらひらしている。枝毛になっていそうな剛毛、こっちに向けられていたつぶらな顔ひとみ。——



おいおまえ何か言ったか。後でクチャクチャ口を  
鳴らす音がするぞ。——ひえいっ大熊だあ。  
口を開けて茫然自失、そして次の瞬間には全員聲  
じかれた様に四方八方でんでばらばらにダッシュ。  
その速い事、時に最後尾にいた者は目を見張る様  
な脚力である。——来た、来た、来た、来たあー。  
パニックである。一人がぱったりとずっこけた。  
観念して目を開けると、熊の姿はもうどこにもな  
く、すぐ前が200メートルはありそうな断崖に  
なっていた。引きつったヒステリックな笑い声が  
誰からともなく発せられる。17時10分鯊岩の  
手前の避難港着、埠頭の近くにテントを張る。夕  
食用に湾内で魚を釣る。ピーピー鳴く奇妙なミノ  
カサゴに似た魚が釣れる、その他雑魚が多数。

7月19日、5時起床。再び山の中へ。全員気  
違いの様に館を鳴らし続ける。獣道だと分かって  
いても歩き易いためその上を歩く。どうせ多少そ  
の道をそれていても熊が出たら同じである。

北側の様相は南側とはまったく異なる。灌木の間  
から透けて見える海岸の岩場は鳥達の楽園であっ  
た。数限りない真っ白な海鳥達が、急峻で我々には  
手も足も出ない絶壁を自由に飛翔している。黒  
い岩を背に点々と映る純白がすばらしいコントラ  
ストを創造している。10時頃ボロモイを通過す  
ると、そろそろ海岸線の通行が危くなってきた。  
トラバースの連続である。岩と岩との間に亀裂が  
生じそこへ海水が流れ込んでいる様なものである。  
ついに立ち往生せざる得ない程の難所に行き当た  
った。山を巻こうにも登れそうな場所が見つから  
ない。行くしかない全員が心の中で追いつめら  
れていた。二度とあの岬付近の山の中へ戻る気が  
しなかったのである。海にはまった方がまだまし  
というものである。少なくとも氷が張ってるわけ  
じゃなし。トラバースを断念して海に飛び込む者、  
岩から剥れ落ちてゆく者、ザックを先にザイルで

向こう岸に渡し空荷でトラバースする者、かくて  
個人の意志は最高に尊重された。この付近のスリ  
ルとサスペンスは、まったく超目玉商品、オスス  
メ品であろう。次から次へと様相を変える自然の  
美しさをここに書き尽くせないのが甚だ残念であ  
る。段々我々の中に確固たる自信が湧いてきた。  
もうだめだと一時は絶望しても必死で血路を開い  
て行くと何とかなるのである。勿論より適切なル  
ートの選択の上においてではあるが。途中番屋で  
ホッケ(魚の名)を分けてもらったりしながら17  
時に鯊岩で4日目のキャンプを張る。

7月20日、相変わらず気温は低い。地形は昨  
日より陰しくなってくる。岩壁は無情にもオーバ  
ーハングしはじめ、ついに泳がなければ前進でき  
なくなった。対岸まで約20メートル。その途中  
に一ヶ所だけ岩が海面近くまで突起している場所  
がある。そこ以外の海の色は絵具を流したような  
濃緑色で深度はまったく不明。沖からの波がゆる  
やかに打ち寄せてくる。まだ午前中で気温はあま  
り上がっておらず、水温は推して知るべし。つい  
に覚悟を決めてザンプとばかり次々に飛び込む。  
と、そこまではカッコよかったが、泳ぎの苦手な  
者にとってはまさに地獄である。ウエストベルト  
を締めていないザックが頭上に覆い被り、なぜか  
水面が目真下にある。キャラバンは重たく足の  
自由はきかないは、体は冷えてくるは、悲惨な事  
この上ない。プカプカ空気を求めてせわしく前足  
をかく様子は亀そのもの。結局二人溺れて、C.L.  
がザイルを口にくわえて四往復する始末。ああプ  
ールボッカをするべきであったと後悔しても後の祭。  
水から上がった後が又輪をかけた悲惨さ。雨の根  
が合わない。びんびん風が吹く中を全員太弱  
に熱せられた岩を愛しい人のごとく抱きしめて少  
しでも体を暖めようとする。わけのわからない有

象無象の虫の繁殖する南だまりのぬるい水の中に平気で寝そべる者もいた。ここに至ってザックの浮力にいささか疑問を抱き始め、下着まで捨てる者が出る。ああ、知床ノボトピラベツ川、知床川、カバルワタラを越え14時頃最大の難所と思われたカシュニの滝に着く。絶壁から直接海に注いでいるカシュニの滝は圧巻であった。滝壺を泳ぐか滝の後をトラバースするかの二者択一を迫られる。トラバースを決意。無事通過。この時の嬉しさはたとえようもない。16時15分たて岩に着くが再び泳がなければ進めなかったのも、時間的余裕を考慮し、テントの張れそうな場所を求めてカシュニの滝との中間地点まで戻る。ようやく見つけた平地ですらエアマットが何の役にも立たないほどの最悪の状態であった。19時10分就寝。

7月21日、8時起床。あらかじめ泳ぐ事が分かっていたので気温の低い早朝出発を避け万全のバックギンをする。ない知恵を絞り考えつく限りの装備を総動員する。ウェットスーツの代用には雨具を、救命具の代わりにエアマットを細引で体に巻きつけ、いざ出陣。この日は長短合わせて6・7回は海に入る。そのすぐそばで漁船が一部始終を見物している時もあった。又ある時は岬を回

る観光船のマイクが反響し、実景以上に近くで聞こえたこともあった。16時、にわかにあたりには人の気配が感じられる。

—— やった、道が見えた！

整地された道がこれ程歩き易いとは……

—— ああ、文明やなあ……

16時6日目のキャンプ。記念すべき日。

我々の心の中を走馬燈の様に駆けめぐる数々の思い、友情の地知床、地の果つる所シリエトク——

(25代)

